大会レポート

微地形、頭脳的、予想外

2009 年 1 月 12 日愛知 OLC 大会トレイルO（愛知県尾張旭市）

こやまたろう
トレイルO
委員会

Ｅ権獲得を賭けた 2009 年最初の指定大会。今年も雪中大会か・・と一時は危うい天候となったが大事無く、愛知 OLC らしい 緻密な読図力を要求するコースに、競技者たちは持てるスキルをぶっつけた。以下はＡクラス・コースについてのレポート。

■微地形に恵まれたテレイン

テレインとなった愛知県森林公園は、小さな尾根・沢がいたるところにあって変化あるコースが組め、車椅子もアクセス可能な道が多く、トレイルOにうってつけのテレインである。

今回は二日間大会の形式をとり、初日はフットO、二日目に恒例のトレイルO大会が開催された。フットO参加 115 名、トレイルOへは 44 名（うちＡクラス 41 名）と賑わった。

Ａコースは 1.6km、up20m、14 コントロールで制限時間 90 分とあるが、これはかなり厳しい時間配分が予想される。先行の競技者達のほとんどがスタートから走り出し、丘の向こうへ消えてゆく。いつもなら最初のコントロールまでは、地図表現の確認をしながら進むところだが、みんな先を急いでいる。

■まずは易しく、とっつきやすく

最初のコントロール「独立樹と独立樹の間」は、DP に向かうまでにチェックできるので易しい。№.２の「湖、南東のふち」は地図表現が難しいところだが、周辺の特徴物との位置関係、距離で解答できる。№.３の「建物、北東の角（内側）」は軒の深い建物を使った時にしばしば出てくる課題であるが、上空から見下ろした屋根の形で建物を描くことを理解していれば易しい。しかし、やはりトリッキーな課題ではある。Ｂフラッグの位置がややあいまい。（正解率 58.6%）

■いよいよ出てきましたヨ

さて次の№.４「尾根」でとたんに難しくなる。眼前の尾根線上に並んだ４フラッグの位置の読み取りで、等高線のトレース技術と距離目測技術を要求するものだが、明瞭な不動地点からのコンパス・ベアリングも有効。

正解率は二番目に悪い 44%を示し、上位者にも誤解答が目立った。

№.４「尾根」４個のフラッグが並ぶ

№.５「小道と小道の交点」は交点の真ん中にフラッグが無いことが視認でき、№.６「岸壁の上」は距離測定で解答はいずれも容易。

■道をはさんだ反対側を

さて№.７「土がけの上」はまともに勝負すると なかなか手こずる。道路と小道の交点が明瞭ではなく、土がけを照合しても いまいちクリアではない。

ここでのキー・ポイントは道路を挟んだ反対側の橋に気付くかどうかにある。橋の北側の手すりの延長線が円の中心に結びつく。周囲の特徴物との位置関係から導き出す解法のひとつである（ガイド・ライン GL-2 地図 3.8 参照）。（正解率 61%）

№.８「小径、南東側」は時間をかけて眺めていると小径の形が浮かび上がってくる。それと距離感からそれほど難しくはない。なお位置説明の「側」は、正しくは「ふち」であろう。

■ハイライト・コントロールは

№.９「浅い沢、東の部分」は非常に難度が高かった。このコースでのハイライトと言って過言ではない。透視可能度のきわめて高い広い沢での地形読み。沢は全面落ち葉で覆われている。

私はフラッグの数の少ないコントロールは「Ｚ」である確率が高い・・という先入観念を持っている。しかし、ここのような 地形もはっきりしないフラットな場所での「正解なし」はあるまいと思い、まずフラッグ群が本当に地図上の円に関連しているかの確認を試みた。沢の形状把握の視認は容易ではなく、また、地図上にあるコントロール西側の水槽や岩との位置関係がややあいまいで頼れない。しかたなく建物の東側、小径表現の石段の終りを基点（不動点）としてコンパス・ベアリングを行いフラッグ群と地図上の円とが正しいこと（＝「正解なし」課題ではないこと）を確認した。ここまでにかなりの時間を費やす。

手がかりとなるのは円内の補助等高線表現であると考え、座り込んでしばらく現場を見つめるうちに、樹木を囲む わずかな起伏がそれであると判読できて、それとの関係でＣを確認。

次に、いまいち はっきりしないが、地図上の沢線の角度からすればＡがその線上にあるものと判断し、それ（沢線）から外れた「東の部分」にセットされたものはＢでしかないと考えた。（沢の「部分」の殆んどは斜面上にある）

結果は正解であったが、正直言って、遠くからの沢の中央線（沢線）の判断には自信がなかった。

ここでは参加者 41 人中半数以上の 25 人がミスアンサー、正解率は 16 人 39.1%と最低を示す。ちなみに他の解答は A-4、C-20、Z-1。非常にテクニカルなコントロールだった。フラッグが５個だったら おそらくお手上げだった。

■ 確認できない「～の間」

制限時間が不足気味となり走り出して№.10「岩と岩の間」へ。DP からは約 25m 先を見上げるもの。あいにく吹雪だしてコントロール周辺は暗くなり確認しづらい。小道の分岐点であろう道標の頭が見えたのでそれとの位置関係から対象物である岩を判定できたが、岩-フラッグ-岩が正しく一直線上にあるのか否かは確認不能。このコントロールのように、動けない状態で「～の間」の課題を解くのには理論と経験が必要。また、このような状況では、中心線を外してＺを作るべきではない。

■尾根上の4本、再び

№.11 は、№.４と同じく「尾根」上に並ぶ４フラッグにチャレンジするものであるが、ここでは尾根に沿って小道があり、その曲がりの視認から容易。上位陣はほとんど正解であったがＺ判定を下した競技者がいたのは興味深い。

■人ごみでフラッグが判らない

さて、次の№.12「南西の柵」は残念ながら問題ありコントロールとなった。バード・ウォッチング場にセットされ

たフラッグ三本の「正解なし」コントロールは、本来ならば易しいはず。しかし・・である。なんとバード・ウォッチャーがその場所に大挙押しかけ、トレイルO競技者がフラッグはおろか、課題の柵の状況が確認できなかった時間帯があり、公平な競技環境が提供されなかった事実があった。

このような人出(人ごみ)がありうる場所をコントロールとして使用することは設計段階から避けるべきである。(筆者の経験では、他に屋外休憩所、あずまや、遊具、競技場のベンチ周辺なども要注意である)　正解率は 44%

■やはり地図読みにはじまり、地図読みに終わるトレイルO

さて気を取り直して取り組んだ№13は、またしても「尾根」。見上げる尾根上に５個のフラッグがある。その尾根の反対方向からもそれぞれ確認できる・・が、その場合 A,B,C が逆になるという知能的なセッティング。
ここで有効なのは、等高線熟読でほんの小さな沢を確認することと、透視可能度のグリーンのチェックだろう。正解フラッグは、グリーンのそばにある。

最後の№14「沢の分岐」の決め手は距離だろう。

そして、ここからはフットOとなり制限時間５分前にプレ・フィニッシュに走りこむ。予想通りかなりタイトな制限時間であった。

■”愛知“らしさの二つの T/C

ここからは２か所のタイム・コントロールまで待ち時間が長く、数十分の行列となる。待機時間が長いと、それまで なんとか持続していた集中力が失せてしまうし、いわゆる「勘」が鈍ってしまう。それは当然タイム・コントロールでの成績に大きく影響する。

やはりスタート間隔は２分であるべきなのか(今日は１分間隔スタート)、競技運営事項として総合的に検討すべき課題であろう。

待ちくたびれたタイム・コントロールは、ひとつのテントの中が２か所に区切られており、TC１が終わるとすぐ隣の区切り（TC２）に移動して異なる方角を眺める趣向。よく考えられている。タイムキーパーは TC チェッカーを使用。

これだけの微地形地帯である。特徴物の方位判断ではなく、地形を読ませるだろうという予想はドン・ピシャリ。TC１は「尾根」を、TC２は「沢」を見下ろす視線で判読させるもの。しかもそれぞれ A-E、 A-D とフラッグ数が異なるのも芸の細かいところ。これぞ愛知 OLC 方式そのものである。正解率はそれぞれ 61%、53.7% と適切な数値。

■さて成績は、上位は大接戦

一時は危ぶまれた全問正解者がついに現れた。木村治雄(入間市 OLC)である。TC１＝16 秒、TC２＝52 秒。粘っても正解するのが勝ち。見事な成績である。

（左）阪本博（中）田代雅之（右）木村治雄

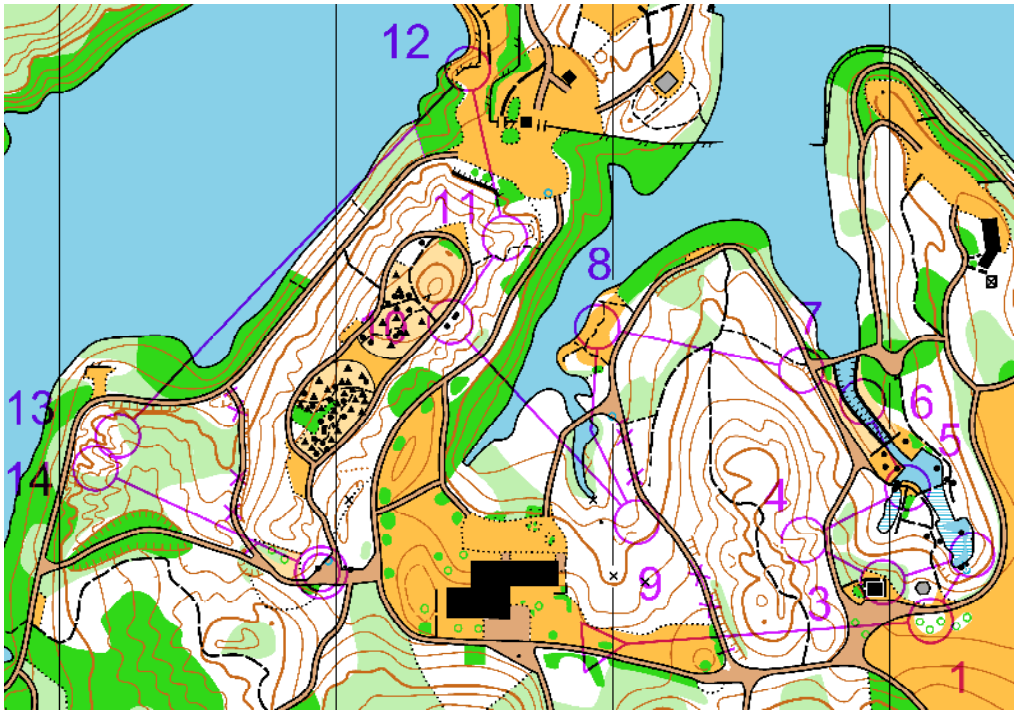
1位	木村治雄	16p.	68sec.
2位	田代雅之	14p.	66sec.
3位	阪本　博	14p.	108sec.
4位	山口拓也	14p.	112sec.
5位	中尾吉男	14p.	120sec.
6位	山口尚弘	13p.	18sec.
6位	吉村年史	13p.	18sec.
8位	大久保裕介	13p.	28sec.
9位	松澤俊行	13p.	46sec.
10 位	山崎貴幸	13p.	84sec.

・・・・・・・・・以上、E 権獲得者

■次回に高まる期待

難・易のコントロールをうまくミックスし、期待に応えたコースであった。（コースセッター：木村 厚、コントローラ：岡野英雄）

具体的なコントロール設定についての IOF のテクニカル・ガイドラインも新しく示された。次回もより良い地図、より面白いコースで競技者とガップリと四つに組んでもらいたい。有難うございました。　　（こやま たろう）



A			1.6 km			20 m	
▷							
1	A-E						
2	A-D						
3	A-C						→
4	A-D						
5	A-D	←					
6	A-D	→					
7	A-D						↙
8	A-E						
9	A-C						→
10	A-D						←
11	A-D						
12	A-C	↙					
13	A-E						
14	A-D						
			130 m				